あとがき

この原稿を執筆している 2023 年 2 月時点で、ロシアによるウクライナ侵攻が始まってからおよそ一年を迎えようとしている。報道は、いまだ終わりの見えない激しい戦闘によって日常を断ち切られたひとびとの暮らしを伝え続けている。研究を通じ長崎を訪れることの多い筆者自身、いま、ウクライナで起きている出来事を前に改めて思い知らされるのは、核には核で対抗する冷戦期の核抑止の思考が決して過去の遺物などではなく、本当はそのもとで日常を送っている私たち自身が向き合ってゆく必要があることである。

その一方で、東アジアの国同士も、残念ながら平和で友好的な関係性を築いているとは言い難い。周知の通り、日本でも冷戦終結がひらいた戦争責任や歴史認識の問題、また領有権を巡る近隣諸国との摩擦が今なお続く。だからこそ、「この 50 年の歩みを共に考える―それぞれの出来事をいま振り返る意味」と題したシンポジウムを開催し、その記録として本書を刊行することは、学術を通じ、国境を越えた東アジアの連帯と相互の対話を積み上げてゆく上で、ささやかではあるかもしれないが大切な一歩であると考えている。

いま、早くて、分かりやすく、刺激的で大量の情報が、SNS はもとより私たちの身の回りを日々行き交っているように思われる。しかし、編者の一人として、熱量をこめて本書に寄せて頂いたそれぞれの論考から感じるのは、本当は複雑な現実を、複雑なままに、時間をかけて共に解きほぐしてゆくことが、私たちに一層求められているのではないかという思いである。本書が、いま私たちの直面する一つ一つの課題を、過去から現在、そして次の未来へと続いてゆく連続的な時間の中で捉え直すきっかけとなるならば嬉しい。

最後に、昨年のシンポジウムに学内外より参加して頂いた来場者の皆様、そして貴重な報告をして下さった執筆者の方々に、改めて厚く御礼を申し上げたい。

2023 年 2 月

編者を代表して　吉成哲平